

Tokyo

有地左右一 笹岡 敬

ギャラリーサージ

8.22-9.3

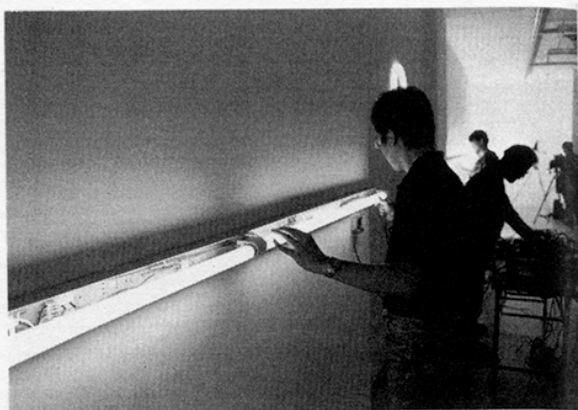
光を手に入れること、それは人間の根源的な欲望であり、光を表現することは芸術家の究極の欲求だったのであろう。写真史の劈頭にあるタゲールは一八二〇年代にパリの広場で光の動きと戯れを利用したパノラマ劇場を開いており、その後の写真家たちも印象派の画家たちも一瞬の光の動きを印刷紙やキャンヴァスに定着させるため多大の努力をした。そして二十世紀も末の今日、蛍光灯やネオンの光溢れる街に住むわれわれはなおも花火や遊園地での光のページェントに心ときめかせるのである。

有地と笹岡が取り組んできたことは光のゆらぎである。つねに蛍光灯を用い、さまざまな仕掛けによって点滅させる。蛍光灯はわれわれが日常的に利用する「生活器具」のひとつであるが、それがい

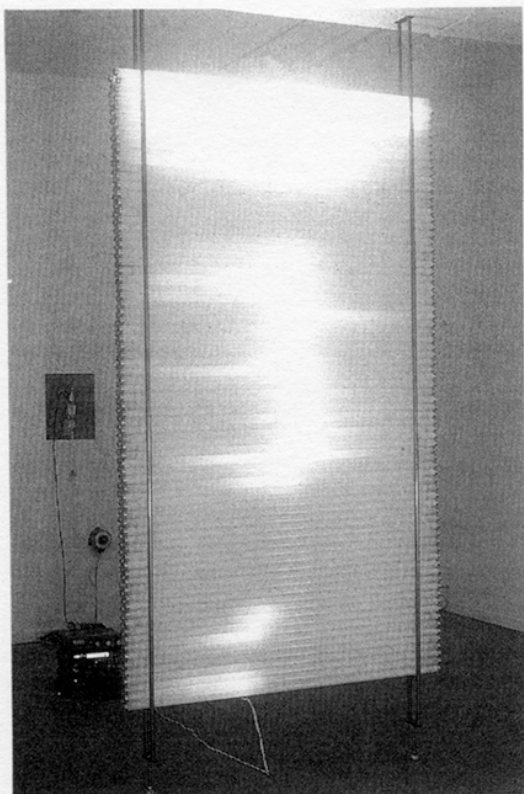
つたん寿命をむかえてちらちらと点滅するとき、われわれの神経はひじょうにいらだつ。しかしこのふたりの仕掛けた「点滅」は逆に見る者を落ちつかせ、心地よい眠りの国に誘うのである。

今回の制作はふたつの画廊の共同作業によって実現した。ふたりは大学でデザインを学び、笹岡は水や光を使う作家としてソロを中心に、照明デザイナーの有地は笹岡とのコラボレーションのみで活動している。

ギャラリーサージで展示されたのは、電極を使わずに蛍光灯を点滅させる作品で、蛍光灯が船の帆のように縦に積み重ねられている。これは管の真ん中を縦にとおした電線から高周波を発することで中のガスが反応して蛍光灯が点灯する仕組みを利用したものである。光は大きく揺らぎ、障子ごしに庭の池にうつる光のゆらぎや木のざわめきを感じるようである。それは管の点滅のかすかな音をマイクで拾って拡大し、エコーをかけた音を流すことによりいっそうその



有地左右一 Soichi Arichi
笹岡 敬 Kei Sasaoka
左—LUMINOUS-1994(ギャラリーサージでの展示風景)
ミクスト・メディア 120×270cm 撮影=酒井信一
上—LUMINOUS-1994(秋山画廊でのパフォーマンス)



印象を高めている。

秋山画廊での作品は、蛍光灯が一本ずつつなげられて壁面に縦横に伸びるインスタレーションである。それらに通常より低い電圧をかける、管を輪切りにしたような小刻みに震える輪が両電極から管の中心に向かって走る。その光の、空気のゆらぎは見る者を深い海底にいるような錯覚に陥れ（それはこの画廊の印象的な階段の存在も大きい）、永遠なる光の輪の連鎖が気を遠くさせる。それは宮島達男のキーコンセプト「それは永遠に続く、それは変化しつづける、それはあらゆるものと関係を結ぶ」とパラレルな関係にあるか。

両画廊の空間の特性を生かした、対照的な展示である。ギャラリーサージでの作品が求心的なオブジェであるとすれば、秋山画廊の作品は開放的な環境芸術であろう。比較的単純な仕掛け、装置によって「生活器具」に潜む神秘性、普段は意識しない電波や時間の存在が鮮やかに提示されることに、われわれ「消費者」の驚きは大きい。このふたつの「明かるい部屋」は十九世紀人が抱いた光、電灯の神秘性への憧憬の眼差しをもう一度われわれに追体験させる装置なのである。